



※写真は搬送のイメージです

当院は、救命救急センター（三次救急指定病院）として、緊急救度かつ重症度の高い患者さんを広く受け入れています。24時間365日ことわることなく、あきらめないとの思いで救急医療にあたっています。

救命救急センターの使命

尾張北部から名古屋市北部に至る広い範囲から患者さんを受け入れ、救急医療にあたっています。「決してことわらない」をモットーに、重症度の高い患者さんを広く受け入れ、地域になくてはならない救急医療機関として機能しています。また、心筋梗塞などの虚血性心疾患や急性大動脈解離、脳出血、脳梗塞、重症外傷、多発外傷といった他病院では受入れが難しい患者さんにも、「決してあきらめずに最善の診療を尽くす」との不屈の精神で急性期医療機関としての使命を果たしています。新型コロナウィルス感染症の重症患者さんも多数受け入れて、救命救急センターで集中治療を行っています。

重症患者さんの救命には救急医療の「質の向上」が欠かせません。また入院後の「集中治療の質」は重症患者さんの生死を左右する大切な要因です。救急外来やICU・救急病棟に常駐する救急科専門医や集中治療専門医を増やし、各科医師、研修医、看護師、他のコメディカルや事務職員との連携を深めることによって、さらなる質の向上を目指しています。

地域連携による救急医療の推進

三次救急指定病院として重症度の高い患者さんを24時間365日休むことなく受け入れている当院ですが、こうした救急医療においても当院は地域医療機関との連携を模索しています。地域の診療所だけでなく休日診療所を含む地域全体で、救急の患者さんをケアしようというもので、これにより当院は三次救急に専念できることになります。救急医療においても役割分担を明確にすることでより質の高い医療が可能になり、ひいては地域における患者さん満足度の向上につながることが期待されています。



令和3年11月に実施した地震防災総合訓練の様子

災害拠点病院として災害医療に対応

救命救急センターであることに加え、免震構造を持ち、資材を備蓄していることなどが認められ、地震や津波、台風などによる災害発生時に災害医療を行う「地域中核災害拠点病院」としても認定されています。南海トラフ地震のリスクが指摘されている中で、当院は防災委員会を立ち上げ、備蓄品の確保や災害時の対応などについて詳細な取り決めを行っています。また、災害時に派遣されるDMAT（災害派遣医療チーム）も結成して万一の事態に備えているほか、災害発生時における地域の病院間連携でも中心的な役割を果たします。



ドクターカーで医師や看護師が現場へ向かいます

2014年よりドクターカーを運用しています。尾張中北消防指令センターから出動要請を受け、医師・看護師が医療資機材を搭載した乗用車タイプの緊急車両（ラピッドカー）に乗り、小牧市内の救急現場へ急行します。現場では救急隊と協力して応急処置を行い、医師・看護師が救急車に乗り込み、治療を継続しながら病院へ搬送します。現場から診療を開始でき、搬送中も高度な治療が行え、早期の医師の診断により病院到着後の治療のスピードが格段に上がることから、救命率の向上が期待されます。

救急車を呼ぶ前に考えよう



【小牧市の救急出動件数】

令和3年中における救急車の出動件数は6,325件で、1日平均で約17件出動しています。また、搬送人数は5,838人でした。

【重症度別の内訳】

搬送した5,838人のうち、軽症と診断された方は2,000人（全体の約34%）でした。

軽症と診断された中には、救急搬送の必要性が低かった場合も含まれます。

【全国版救急受診アプリ Q助をご存じですか？】

急な病気やけがをしたときに、救急車を呼ぶべきか、判断に迷った時は、総務省消防庁が作成した「全国版救急受診アプリ Q助」が役に立ちます。このアプリは、質問に答えていくだけで、緊急度に応じて「今すぐ救急車を呼びましょう」、「引き続き、注意して様子を見ましょう」などが表示されるので、救急車を今呼ぶべきかどうかを判断してくれます。ぜひスマートフォンなどにダウンロードして、活用してみてください。

【最後に】

救急車の台数には限りがあります。救急出動件数が増えることにより、真に緊急治療が必要な人のもとへ救急車の到着が遅れ、救えるはずの命を救うことができなくなる恐れがあります。そのようなことがないよう、本当に救急車を必要とする人のために上手に救急車を利用し、皆さんのが安心して救急医療が受けられる社会を目指しましょう。

【全国版救急受診アプリ Q助】
ダウンロードは[こちら](#)



iOS版



Android版